

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

平成 30 年 9 月 30 日現在

今月の重点活動

■ ほうれんそう ほうれんそうにおける農福連携

飛騨ほうれんそう産地では、調製作業に多くの人手を必要とするため、労働力の確保が大きな課題となっている。その解決方法の一つとして、農福連携が挙げられている。

農業普及課では、（一社）岐阜県農畜産公社（ぎふアグリチャレンジ支援センター）と協力して、地域の福祉事業所や農福連携に関心のある農家等を訪問し、農福連携に関する情報収集や相談を行った。

そして、各関係機関等との連携や相談の結果、上記センターの事業「障がい者農の雇用モデル支援事業（受入体験助成）」を活用し、実際に農福連携に関心のある農家に、一定期間障がい者の受入れ体験を実施してもらうこととなった。

農業普及課では、今後も受入れ体験の実施における支援や関係機関との連携を行い、産地の課題解決及び農福連携の推進を行っていく。



【受入体験に向けての
打合せの様子】

新たなブランドづくり

■ スナップエンドウ 夏作スナップエンドウ栽培研修会を開催

農業普及課では、農業者の所得確保につなげようと、夏作スナップエンドウの作付けを推進している。

稲刈り後や、トマトの収穫打ち切り後に収穫時期を設定することも可能で、生産者を幅広く募集しながら生産拡大を進めている。

スナップエンドウは、甘みとパリッとした食感が特徴で、近年人気が高まっている。市場価格は高く、収量も見込めることから高い収入が期待できる。

普及課では、8月13日（月）に収穫したサンプルを並べて品質や規格を揃える目揃え会も兼ねた栽培研修会を実施した。場所は、高山市丹生川にある、新品種を試験的に栽培したほ場と、8月上旬に播種を行ったほ場の生育状況について確認した。

当日は、夏作スナップエンドウ栽培に取り組む農家ら12人が参加し、指導にあたったJAひだ本店、農業普及課は「他産地の出荷が少ない時期を狙って栽培できるのが飛騨地域の最大のメリット。作りこなすのは難しいが試行錯誤を重ねて成功させたい」と話した。参加者は、病害虫防除、肥料を撒くタイミングや、播種の方法など、活発に質問を出していた。



【研修会の様子】

■宿儺かぼちゃ 宿儺かぼちゃ品評会を開催！

飛騨地方の特産物である「宿儺かぼちゃ」の今年の出来映えを競う品評会が9月9日（日）に開催された。今年で14回目となる本会には、一般部門、大物部門、ユニーク部門に計75点が出品され、うち一般部門と大物部門について、大きさ・揃いのよさ、外観品質などを農業普及課長、市場関係者らが審査した。

また、入賞した宿儺かぼちゃは、11日（火）に高山市公設卸売市場にてセリ販売を行い、最高で1本 10,000円の値がついた。

農業普及課では、今後も安定生産、品質向上等に向けた宿儺かぼちゃ研究会の取り組みを支援する。



【審査の様子】

多様な担い手づくり

■新規就農 青年等就農資金借入れに向けた個別面談を実施

新規就農者は就農に関する多額の初期投資が必要となり、その殆どが営農開始前後に集中する。

9月19日（水）に、この春に就農した和牛繁殖農家より、素牛導入を図るための借入れの相談があったため、個別の資金面談を実施した。

当日は、初めに必要資金の内容について改めて確認し、内容に沿った借り入れができるよう、必要書類の記載方法やポイントについて説明を行った。

就農後数年間は資金を必要とする就農者が多く、新規就農者が必要時期に経営拡大に十分な投資ができるよう、農業普及課では今後も資金の借入れに関して支援を行っていく。

■担い手 就農体感ツアー(高山市・飛騨市)を開催

高山市就農支援協議会及び飛騨市農業支援協議会では、それぞれ9月8日（土）～9日（日）、8月26日（日）と9月30日（日）に就農体感ツアーを開催し、関西・関東方面から合計7名が参加した。

これは、広く市内の農業・暮らしを知ることや、農業者との交流、農作業体験を通じて、市内での就農イメージを描いてもらう事により移住就農につなげ、人口増加及び農業の発展に寄与することを目的としている。

高山市、飛騨市とも特徴ある内容のツアーで、トマト新規就農者、長期研修生、トマト選果場等の視察やトマトの収穫作業も体験した。移住後農業経営を考えている参加者もあり、ツアーの成果がもたらされた。

農業普及課では、関係機関と連携しながら就農希望者の面談～研修、就農後の経営安定まで、今後も継続して支援していく。



【熱心に話を聞く参加者】

売れるブランドづくり

■ 水稲 高標高地帯の良食味、安定生産を目指して

飛騨地域では高標高地帯における良食味、安定生産を目指して、新たな品種の現地適応性を確認しており、9月14日（金）に高山市丹生川地区の成熟期調査等を行った。

当日は担当農家、JAの協力により供試品種と対照品種の穂数等の収量構成要素について調査、今後、収量、食味等を調査するためのサンプリングを行った。本年は梅雨明け以降異常高温で推移し、平年に比べ生育が早まったが、その後は順調に生育し、懸念された獣害も無く、無事収穫期を迎えた。

今後は収量、食味等各種調査を行い、当品種の現地適応性について検討していく。



【成熟期調査風景】

■ ダイコン 発生数の見える化で、今年もキスジノミハムシ被害激減！

高山市荘川町ダナ生産団地のダイコン栽培では、収穫始めの8月下旬～9月上旬にキスジノミハムシの被害を受けることが多く、どのように防除しても防ぎきれなかった。そこで農業普及課は独自に開発した「キスジトラップ」を要所に設置し、一週ごとに発生数を調査してトラップ本体に書き込み、発生数がリアルタイムでわかるようにした。また地図に発生数を記入して農家にFAXし、発生場所が分かるようにした。同時に農家には、効果の高い農薬を使用できる収穫前日数の制限順に並べた表を配布した。

これにより、キスジノミハムシの発生に応じて適期に必要な防除が行われるようになった。ダナ団地は今年、2回の台風と豪雨および長期の干ばつで激しく痛めつけられたが、収穫を開始してから現在まで、ダイコンのキスジノミハムシ被害は激減しており、ダイコンの単価が上がったこともあって、農家の努力が報われる結果となった。



【強い誘引力で見逃さない！】

■ 水稲 水稲育苗ハウスを活用したイチジク栽培

大野郡白川村の農業生産法人では、8月中旬より水稲育苗ハウスを利用したイチジクのコンテナ栽培で収穫が始まった。飛騨地域において、イチジクの産地化は過去に事例が無く、白川村では新たな特産品として期待されている。

農業普及課では、村役場と連携し、コンテナ栽培によるイチジク栽培について、増殖方法や灌水方法、施肥・防除に関する内容の指導を行っている。今後も引き続き、水稲農家に対し、育苗ハウスの有効活用と支援を実施していく。



【コンテナ栽培のイチジク】

■夏秋トマト 高山トマト部会中間目揃会研修会実施

高山蔬菜出荷組合のトマト部会では後半の出荷に入ったことから、出荷規格の目合わせをしっかりと行うため、着色や規格の確認を改めて行った。

台風 21 号の被害復旧が終わらない中、生産者や関係者で負けずに最後まで出荷していこうと意識の向上を図った。農業普及課では、強風により傷がついた葉や実に病害が及ばないように、薬剤の選択や対策について研修を行った。



【規格確認の様子】

■ほうれんそう 出荷調整作業場の実態調査

飛騨ほうれんそう産地の最も重要かつ喫緊の課題が「労働力不足問題」である。特に出荷調整作業における労力不足が深刻となっており、このままでは播種(栽培)面積の減少＝産地規模の縮小は避けられない。

そこで農業普及課では問題解決に向け、県農産園芸課と連携して農家の出荷調整作業場の実態調査を行った。経営規模を5段階(30a未満、30～60a、60～90a、90～150a、150a以上)に分け、段階ごとに5軒の農家(計25軒)を選定し、作業場のレイアウト、使用されている機械、パートの人件費などについて調査した。

調査によって得られたデータを基に、労力不足解決のための方向性(例：作業場の共同化など)を産地に提案し、全国一の夏ほうれんそう産地の維持拡大を目指していく。



【調査に訪れた作業場】

■春菊 春菊芯枯れ症の調査を実施

吉城蔬菜出荷組合春菊部会では、毎年夏場の高温期に生長点が黒く枯れた様になる「芯枯れ症」が発生しており、春菊の見栄えを損なっている。生長点のカルシウム欠乏が発生の原因であるが、カルシウム施肥では抑えきれず、芯枯れ症の発生を抑える具体的な対策はまだない。

そこで、農業普及課では、芯枯れ症の発生と関係のある要因を推定するため、7～9月にかけて複数の生産者圃場において、気温・地温、土壌水分、土壌硬度、芯枯れ症の発生している株と発生していない株の形態的特徴等を調査した。今後は、データをまとめるとともに、芯枯れ症の発生を抑えられるよう考察を進める。



【春菊芯枯れ症】